

京鹿子

京鹿子祭特集号
1月号
1997年11月15日
1000册
1000册



1月号

京鹿子祭特集号

新曆
丸山佳子

天高し生かされ賜はり合掌のみ

四高碑にわれは湖の子鴨集ふ

諦めのよい手相にて桐一葉

人はみな汗の器かお風呂好き





秋分や野に添う水を湖が待つ
月仰ぐ人さし指を書にはさみ
嵯峨ハッピーロツクバンドで運動会
あれほどの人は何処へ日傘一本
いま置きし物につまづく神無月
新暦に時計鏡も拭き浄め

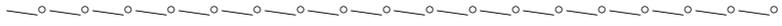


豊 田 都 峰

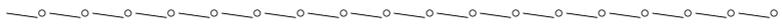
清響集 その八十一

木 枯 の の こ せ し も の の か げ あ ま た
木 枯 の は て 一 灯 の ひ く か り し
夕 茜 し わ く ち や に し て 大 根 洗 ふ
大 根 を 干 せ ば し た た り 落 ち ゆ く 日
立 冬 や ま づ は そ の 気 に 雲 も な り
ひ と つ 灯 の お よ ば ぬ あ た り の ひ と し ぐ れ





観音の里の背山をすぐしぐれ
片時雨きのふののこるあたりなる
三四羽の鴨のきてゐる川日和
木の葉散る第四幕のうす明り
再会す紅葉模様をかさねあひ
木の葉散る自力の他力と木の葉ちる
六道の辻に迷ひて小春なる
凧やふと奪衣婆のあたりとも



秀華採集

みの虫に住民票をたのみまる

森本虹泉

宙に垂れているみの虫、そこに作者とのつながりが出来るが、この関係を表現のように考える俳趣は拔群である。頷いた作者へ蓑虫はひとしお揺れる。

風聞にうかとのりたる草の絮

大西優九里

月雫一滴足せば銀の靴

鳥羽夕摩

前句は自画像。思わぬ所に根付くかも知れない今後の不安も少し覗く点もよい。後句の一滴も自分の思いかもしれない、けれど叶えられそうにないが、この叙情性は作者の根源にあるものだろう。

鈴鹿 仁

仏手柑

光明と謂ふ恵みあり仏手柑
懐炉買ふ背水といふ重きもの
人生は節目の多し懐炉負ふ
人恋ふて師走の風の人となる
師走くる独語を晒すネオン灯
冬用意百聞にしてははの訓
花石菘や少年の背に陽を集め

近 詠

宇都宮滴水

恵方みち

初鶏や鳴かねば神は遠離かる
さりげなき会釈も在りし初詣
人まねの猿に一月去り難し
朝やけの雲一陣の風逸らす
初御空放浪の先定まらず
気怠さの会釈も在りし初詣
放浪の先は定めず恵方みち

神麓集



西陣千両ヶ辻界隈 山田をがたま
千両ヶ辻に地方者迎ふ秋日和
秋草活け生糸屋誇る箱階段
座敷庭整へ冷茶ふるまはれ
西陣へ清明社御輿のふれ太鼓
清明祭の獅子にかぢられ厄落とす

おもひごと

北川 孝子

片割月西へ急く夜のおもひごと
息継ぎのやうなひととき萩に風
なごり鯉女系伸よくたくましく
急がねば追はるるよはひ野菊晴れ
紺野菊こころに風の吹く日かな

川崎 光一郎

秋刀魚焼く煙の醸す一行詩
一湾の秋の灯まさしに首飾り
秋の夜の団楽もなき家族かな
晩年の輝きめけり秋没日
今の世のをとこのやうな秋桜

十三夜 柴田 朱美
人肌より少し冷たい十三夜
車椅子の吐息のやうな十三夜
点滴のとろとろ落ちる十三夜
玻璃の汚点やたら気になる十三夜
寝返へれば淋しい首よ十三夜

野紺菊

伊藤 希眸

江戸菊の江戸の下町露地あかり
懸崖の菊に余念のなき漢
風にのる菊の香人形立ち通し
大輪の菊に人の名法の庭
登る足すこしゆるめて野紺菊

高木 智

蓑虫の翳れば糸を吐く少し
蓑虫となり天平の貌となる
蓑虫の風来て風に身をまかす
蓑虫の天真となる日和かな
野菊咲く呉越同舟資料展

神麓集



独り旅 森津三郎
今日の花明日咲く花酔芙蓉
秋の風どこから来たの孕み猫
尻尾だけ動かす猫の秋ずぼら
棟上げがすんでそれから秋の空
蟋蟀に呼び止められて独り旅

唐門丸井巴水

なみだ目の枯蠅螂や門ひとつ
一族の滅ぶ狭間の月夜茸
唐門は勝者の悔悟ちちる虫
足軽の数だけ立てり占地茸
師の雪の積もる唐門なほ降り

奥村鷹尾

祭寿司頬張り義齒もて噛みあぐね
行く春も佐保の美化とて子等の作務
江戸末の文書読み得ず書を晒す
佐保堤長くる草抜く彼岸花
噴水の四方より立ちし秀がはぢけ

草むら 松平菩提子
孤つ舎のいよいよ虫の音に埋もれ
鈴虫を認めり先づは翁ひげ
逍遙や鈴虫の音を拾ひつつ
鈴虫に草むらのまま残しをく
続々と工事車入れり鴟の贅

穂田明り 松本鷹根

水澄めり鷺に自慢の首ありて
寝転びて実草を空に和ませる
額衝きの暗さ木犀香に委ぬ
威し銃風一枚に田面押しす
病院の窓の読書の穂田明り

小堀寛

ちちははの離るがごとく無月寛
宰相に石撃つ汝よ霧のなか
空海へメールを打てり寒銀河
新米と十五穀米あそびけり
戯れごとの翁と嫗かいつぶり

海道賞受賞作品

東京都

木山杏理

既作

六腑にも継ぎ目あるらし啄木忌

神名備の真水ゆつたり稲の花

寂しさの極みはんざきに逢ひたい

稲妻の寸時ゴツホがこちら向く

浜日傘風知るためのイヤリング

遠野火や切なるものの母消ゆる

折りかけの紙の雛翔つ十三夜

枯るるには少し間のある遠こだま

貝殻の私語ほろほろと星月夜

白鳥を容れて里山昏れそむる

新作

家系てふ四方に溢るる花擬宝珠

麦秋の琥珀を握り乳母車

啓蟄の日だまりを抱く夜泣石

家といふ影の揺れてる葦の花

椰子の葉の宙を操るつばくらめ

陽へ浮かび翳りへ沈む蜩蝶

七癖のひとつ抜け出す今年竹

桐の花身丈にあまる縄梯子

わがままな山椒魚と共存す

心音の昂りよそに百日紅

折紙の母が漕ぎ出す大銀河

指先は風の重さの赤とんぼ

走り根をゆつくり越ゆる蜥蜴みて

辻売りのフランスパンに小鳥来る

曇天を支へてをりし一人静

思ひ切り捨てし余白へ秋ぼたる

羽抜鳥主貌して闊歩せり

渡らねば霰降りくることたしか

吾亦紅影の手となり禱りかな

絆てふ器がのこり実万両

京鹿子大賞受賞作品

京都府

井上菜摘子

ふりむいて科ふやしたる夏帽子

葛の蔓引いてふるさと解きにけり

身の内にはがねの匂ひ水を打つ

整列のうしろが遠い鯛雲

看取る夜の月への梯子はづしおく

野紺菊ははの履歴に足しておく

逝く人と息ずれてゆく梅雨暁

現在地ゆすれば木の実時雨かな

たれよりも足元ぬらし墓洗ふ

いくつかの吾れのひとつへ月の雫

やくそくのオルガン踏みに小鳥来る

脇道が妙に明るき近松忌

さざんくわの落剥半音下げておく

はるかなる音叉へ応ふさくらの芽

遠き火事人傷つけしことふいに

甲冑はまだ怒涛なり花しんしん

蓮枯れておもしろくなる舞踏会

菜の花を点してをりぬ感情線

がうがうと海馬を過ぐる雪解水

桜貝わたくしといふ遠流かな

ト書から荷くづれの音春の雪

ふるさとは包みきれざり青葉木菟

きさらぎの鏡の奥の兄起す

夏鴉齡のどこを鳴きぬるか

いぬふぐり跨ぎて一頁もどる

幟立つ父の杭かもしれぬなり

落し蓋とれば菜の花畑かな

ゆふやけの端をめくれば磨崖仏

野遊びのうしろを媪の糸車

合歓咲いてこれよりの道できあがる

京鹿子新賞受賞作品

滋賀県

田畑耕之介

香水のをんなが仕切るクラス会

毬栗や出世頭は餓鬼大将

向日葵や子に全方位未来あり

裂け目より天下窺ふ丹波栗

今朝秋や上り框にそぞろ神

なにがしの贖罪にせむ鴟の贄

門を渡して自若野分寺

ご放念あれと山茶花こぼれつく

つかつかと来て鶏頭の頸刎ねる

すべもなき旅の汚れや白鳥来

京鹿子新賞受賞作品

京都市

宮本 幸子

流れ星神の落せし耳飾り

落し水家号で呼び合ふ隣組

余生なほ胸の内なる雲の峰

除夜の鐘余白のやうな刻のあり

百日草三日坊主は習ひ事

蜂蜜いろ落日に染む小白鳥

倅せを大盛りにして月の宴

早春や心に羽の生え始む

身の丈に合つた生き方ぬのこづち

葬送の夫の涙は風花に

京鹿子新賞受賞作品

神奈川県

平佐和子

捨印を欄外に押し山背来る

カンナ燃ゆ救急病棟非常口

陸上部一群の過ぐ雲の峰

ポインセチアおしやべりスペイン料理店

炎天のドラムステックよく弾む

当てずつぼう賽銭投げて初詣

有頂天の噴水私を呼んでゐる

田作りのお頭付を猫にやる

鳳仙花となりのひとはうはさ好き

駅前の小便小僧きらり春

募集大作賞

京都市

村田富美子

夕顔のほぐれる闇へ逢ひにゆく

昼ちちろ戸籍いちまい消しにゆく

銀河濃し合鍵ひとつ預かりぬ

喪中なり影をつくろふ秋の蝶

白菊の一本つつの通夜あかり

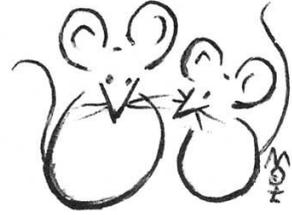
日日かざる気配もなくて吾亦紅

乗り替へてけふより月の人となる

赤とんぼ形見のめがね磨かねば

喪ごころの真つ只中や秋風鈴

心底はまだ癒させれず後の月



京鹿子集

豊田都峰選

みの虫に住民票をたのまると

蓑虫のたるる我が家のかしぎかな

柿の村家のしきたり細るなり

ふところの文をぬくめり初しぐれ

京の秋偽の舞子もゐる嚙

秋されの暮れてかすかに雨の音

風聞にうかとのりたる草の絮

雨截つて走る時空や葛葉裏

淋しさの通りすぎれば秋あかり

秋たるるこの世の端にゐて楽し

枚方 森本 虹泉

城陽 大西優九里

唐辛子曲りて遠き山河かな

月雫一滴足せば銀の靴

わたくしと乾いてをりぬ吾亦紅

縞柄を小粋に着てや西鶴忌

大雨戸門一つ霧へさす

ちぎれ雲半島は穂を孕みけり

台風の目に抗ひて貝割菜

秋めくやことに野菊の墓あたり

秋の雷嬢歌の峰の彼方より

巾着田より溢れ出でたる曼珠沙華

京都 鳥羽 夕摩

千葉 河内 桜人